

VOL. 01

グローバルな舞台で、 英語で専門知識を 使える人材を育てる

グローバル化が急速に進む現在、日本企業では、グローバルに活躍できる人材の育成へのニーズが高まっており、大学でもその要請に応えようと変革を始めている。なかでも、英語での教育に力を入れる大学が増えてきた。留学生と日本人が半数ずつ在籍し、日本語と英語による二言語教育を展開する立命館アジア太平洋大学や、最低1年間の海外留学が卒業要件となる国際教養大学などは、グローバル人材の育成に大学全体で取り組むことで有名である。さらに、上智大学や早稲田大学をはじめ多くの大学で、英語で授業を進める学部や学科を創設している。

大学教育が変わり始めた今、その出口である企業の採用や教育は現状のままでもいいのか。それを考えるための新たな視座への一歩として、「英語“で”経営学を学ぶ」を実践する立教大学経営学部国際経営学科で学ぶ学生の姿を紹介する。

*1 English for Academic Purposes : 学問や研究などを目的にした英語。学術英語

*2 国際ビジネスコンテスト (Retail Futures Challenge 2010) : 2010年10月25日ベルリンで開催。東京、ロンドン、ムンバイ、ミラノ、香港、ニューヨークの学生の代表が「自分たちの都市のブランド価値を表現するための斬新なコンセプト」をテーマに約1000人の有名企業の重役の前でプレゼンテーションを行った。

英語で経営学の専門知識を学び、
グループワークでリーダーシップ養成
立教大学 経営学部国際経営学科



松本 茂氏
経営学部
国際経営学科 教授

立

立教大学経営学部は経営学科と国際経営学科を擁し、「まれにみる経営学部」をキャッチコピーに特色ある教育を行っている。「国際経営学科では、『英語で学んだ経営学の専門知識を活用し、グローバルなビジネスの舞台でリーダーシップを発揮できる人材』の育成を目指しています」と経営学部国際経営学科の松本茂教授は語る。

国際経営学科の特徴は、大きく2つある。1つは、英語と日本語で学ぶという点だ。「一般教養や一部の専門科目は日本語で授業を行います。専門科目の7割は英語による授業になります」(松本氏)

カリキュラムは、バイリンガル・ビジネスリーダー・プログラムが核となり、「英語で英語を学ぶ」から、「英語で経営学を学ぶ」に段階的にシフトしていく。入学の時点では海外在住経験のない学生がほとんどのため、1年次の夏には3週間の海外短期留学を必修とし、まず「英語で学ぶ」ことに慣れさせる。そして、秋には、英文の多読とディスカッションによって、文意を英語で把握できる力をつける。2年次前期には国際経営論を日本語で学ぶとともに、「EAP*1 2」の授業で英語力を伸ばしたうえで、後期から英語による専門科目「International Business」を学ぶ。「3年次以降は留学生と一緒に講義を受け、4年次の授業は英語圏の大学とほぼ同じレベルの内容、スピードになります」(松本氏)

2つめの特徴は、グループワークが多いことだ。協力企業から与えられた課題に対して、グループで解決策を考え、それを企業の担当者にプレゼンテーションするという演習に1年次から取り組む。2010年度の1年生は、ある外食サービスの企業から「若い来店者を増やすためにはどうしたらいいか」をテーマとして与えられ、新メニューの開発やブランドイメージの転換などを提案した。3年次には企業に対し英語で提案書を作成し、英語でプレゼンテーションを行う。

「トップの学生たちは、他国の優秀な学生と競えるところまでできています」と松本氏が語る通り、2010年には世界6都市の学生代表が集まる国際ビジネスコンテスト*2で、国際経営学科の3年生チームが優勝を果たした。また、卒業生に対する企業からの評価も高い。英語の会議でも臆せず発言し、チームの一員として積極的にプロジェクトに参加しているという。「海外にインターンシップに行き、そのまま現地の企業にスカウトされて就職した学生もいます」(松本氏)

内向き志向が指摘される現在の若者だが、その認識を疑わざるを得ない光景をこのキャンパスで見ることができる。

立教大学
経営学部国際経営学科

- 創設：2006年4月
- 学生数：1学年約150人（比率 女55：男45）
- 教員数：35人
- 目指すべき人材像：①高い倫理観を備えた社会の模範となる人材 ②経営学の基礎的な知識を有する人材 ③異文化にも柔軟に対応し、使用する言語が英語でも日本語でもチームの一員として活躍できる人材。かつ、そのなかで、自発的にリーダーシップを発揮できる人材
- 卒業後の進路：就職先は商社、金融機関、メーカーなどが多く、一方で将来起業することを想定してベンチャー企業に就職する学生もいる。立教大学の他学部と比べて国際経営学科の女子学生はキャリア志向が強く、総合職を希望するケースが多いという

3年次の専門科目「Business and Society in Japan」の授業。学部内では常時40人近く在籍する交換留学生と一緒に学ぶ環境を提供しており、この授業も50人近い受講生のうち半数が交換留学生だった。留学生の出身国はデンマーク、シンガポール、アメリカ、カナダなど、20カ国を超える



この日の授業の内容は、グローバル企業が日本で事業を展開する際に直面する課題の考察。日本人学生も積極的に発言し、ノートも英語でとっている

担当のスcott・デイヴィス教授は、日本語が堪能で日本文化にも造詣が深い。だが、授業中はすべて英語である。35人いる教員のうち、外国人教員は10人

写真は専門科目「International Business」の英語サポート科目の授業風景。2年次の英語による専門科目の講義は、講義の理解を支援する英語サポート科目が必修となっており、専門科目で使う単語や基本的な理論などを予習、復習する。サポート科目であっても使用する教材や会話は全部英語だ。3年次の英語による専門科目には、こうした支援はない

英語サポート科目では、20人前後の学生が4人から5人のグループになる。教員が作成した教材にしたがって、学生同士がディスカッションしながら学んでいく



各部屋に1人か2人、留学生が「Student Assistant」としてつき、レポートを書く際のライティングアドバイザーやグループディスカッションのファシリテーターの役割をする

英語サポート科目を担当するのは英語教育の教員だが、専門科目の教員と連携をとり、何をどう教えるか、どんな教材をつくるか、といったことを週1回のスタッフミーティングで入念に打ち合わせている。同一のシラバスに基づいた同一の指導法を確立しているために、教員によるばらつきはない



休憩時には、日本人学生と留学生が話をする光景があちこちで見られる。日本人学生の英語も流暢で、笑い声が絶えない



学食では、ほかの学部の日本人学生も留学生と交流できる。ランチタイム以外でも、多くの学生でにぎわう